

短期大学における中学校二種（家庭）教員免許の意義と課題

森 田 清 美*¹

1. はじめに

短期大学部総合生活デザイン学科は、卒業時に短期大学士（生活学）の学位授与とともに教職科目及び教職に関する専門科目の単位を取得し、中学校教諭二種（家庭）教員免許の取得が可能である。学生の多くは一般企業へ就職するが、非常勤講師や臨時採用教員または教育関係の仕事に就く学生が細々ながらいる。筆者が赴任後、延べ33名が中学校教諭二種免許状を取得し、社会に巣立った。教員を目指す際に、2つの大きな課題がある。1つは三週間の教育実習への取り組み、もう一つは教員採用試験である。教職課程履修生の中には教育実習の経験で“やりがい”を感じて「先生」を志す者がいる。しかしながら、教員採用試験に合格し専任教員への道は厳しく、各都道府県が実施する教員採用試験は中学校教員と高等学校教員の志願者が同じ試験を受験する場合が多い。教員養成系4大卒や修士卒も同じ条件で試験に挑み倍率も高く新卒で合格することは難しい。

清水¹⁾は中学校教諭二種免許の歴史的 성격に即して短期大学における教員養成の意義をあげ、教育現場のさまざま実態に対応して重要な役割を果たしているとしている。学生の教員志望は社会情勢や教員採用状況に関係する。特に中学校「技術・家庭科」の教員の採用枠は、専任（本務者）ではなく、任期臨時採用や非常勤である。中学校「技術・家庭」は主要教科とは違い週当たりの教科時間数が1～2時間のため、中学校の規模（中学校の生徒数及びクラス数）によっては、家庭科教員は1～3学年の全クラスを一人で担当し、あるいは近隣校に複数勤務という状況も珍しくない。このような状況でも教職課程を履修し、中学校二種教員免許の取得を目指す学生がおり、卒業後も教員として仕事に就きたいと志望する者がいる。

短期大学における中学校二種（家庭）教員免許の意義について、教育実習と教員採用試験という2つの観点から検討し、併せて教員養成の課題を考察する。

2. 調査の概要

本学科における中学校教諭二種（家庭）免許の教科に関する科目は「生活経営学」「人間関係学（含家族関係）」「衣生活論」「ファッション造形実習Ⅰ」「栄養学」「食品学」「食生活実習Ⅰ」「住生活論」「保育学」9科目である。本研究では教科に関する専門科目9科目のシラバスをもとに中学校「技術・家庭（家庭分野）」の指導内容を学習指導書要領²⁾の中学校技術・家庭（家庭分野）の内容一覧表に照らし

*1 総合生活デザイン学科

合わせ、指導内容が包括しているか否かを検討した。包括していると考える場合を「A」、そうでないと考えられる場合を「B」と記載した。また令和2年度広島県教員採用試験「中学校 技術・家庭（家庭）」試験問題³⁾を本学科の教職に関わる専門科目の授業で既習しており問題を解くことが出来ると考えられる場合を「◎」、未既習のため問題を解くことが出来ないと考えられる場合を「×」、大学での授業では用語は取り上げているが問題を解くには不十分と考えられる場合を「△」と記載した。さらに2014年～2020年に教職課程履修学生に「家庭科教育法」の授業ガイダンスで、中学校教諭二種免許状（家庭）取得の主な理由を個別面談で聞き取り調査をした。

3. 結果

1. 中学校教科指導と大学での学修

本学科の教職に関わる専門科目9科目のシラバスをもとに中学校「技術・家庭（家庭分野）」の指導内容を学習指導書要領²⁾「中学校技術・家庭（家庭分野）」の内容一覧表に照合すると、教職に関わる専門科目の指導が中学校での指導内容が包括していると考えられる授業は「人間関係学（含家族関係）」「衣生活論」「栄養学」「食品学」「食生活実習Ⅰ」「住生活論」「保育学」の7科目である。包括しないと考えられるのは「生活経営学」「ファッション造形実習Ⅰ」である。また『環境』に関して、「衣生活論」「住生活論」の中で部分的に取り上げているが環境に配慮した消費生活の視点はない。大学での授業の学修では分野によっては教科内容が薄い状況があるため、そのため教育実習時に担当するとなった場合、教育実習校の指導教諭の指導に委ねている。学生は教育実習中の休日に大学に来て教職担当の教員の指導を受けながら学習指導案作成や授業準備をして授業に臨んでいる実情がある。

表1. 中学校技術・家庭（家庭）の内容と大学の教科に関する科目の関係

中学校技術・家庭（家庭）の内容	大学の教科に関する専門科目	包括
A 家族・家庭生活 (1) 自分の成長と家族・家庭生活 ア 自分の成長と家族・家庭生活との関わり、家族・家庭の基本的な機能、家族や地域の人々との協力・協働	「人間関係学（含家族関係）」	A
(2) 幼児の生活と家族 ア（ア）幼児の発達と生活の特徴、家族の役割 （イ）幼児の遊びの意義、幼児との関わり方 イ 幼児との関わり方の工夫	「保育学」	A
(3) 家族・家庭や地域との関わり ア（ア）家族の協力と家族関係 （イ）家庭生活地域との関わり、高齢者との関わり方 イ 家族関係をよりよくする方法及び地域の人々と協働する方法の工夫	「人間関係学（含家族関係）」	A

短期大学における中学校二種（家庭）教員免許の意義と課題

<p>B 衣食住の生活</p> <p>(1) 食事の役割と中学生の栄養の特徴 ア (ア) 食事が果たす役割 (イ) 中学生の栄養の特徴, 健康によい食習慣 イ 健康によい食習慣の工夫</p> <p>(2) 中学生に必要な栄養を満たす食事 ア (ア) 栄養素の種類と働き, 食品の栄養的特質 (イ) 中学生の1日に必要な食品の種類と概量, 献立作成の方法 イ 中学生の1日分の献立の工夫</p> <p>(3) 日常食の調理と地域の食文化 ア (ア) 用途に応じた食品の選択 (イ) 食品や調理用具等の安全と衛生に留意した管理 (ウ) 材料に適した加熱調理の仕方, 基礎的な日常食の調理 (エ) 地域の食文化, 地域の食材を用いた和食の調理 イ 日常の1食分のための食品の選択と調理計画及び調理の工夫</p> <p>(4) 衣服の選択と手入れ ア (ア) 衣服と社会生活との関わり, 目的に応じた着用や個性を生かす着用, 衣服の選択 (イ) 衣服の計画的な活用, 衣服の材料や状態に応じた日常着の手入れ イ 日常着の選択や手入れの工夫</p> <p>(5) 生活を豊かにするための布を用いた製作 ア 製作する物に適した材料や縫い方, 用具の安全な取り扱い イ 生活を豊かにするための資源や環境に配慮した布を用いた物の製作計画及び製作の工夫</p> <p>(6) 住居の機能と安全な住まい方 ア (ア) 家族の生活と住空間との関わり, 住居の基本的な機能 (イ) 家族の安全を考えた住空間の整え方 イ 家族の安全を考えた住空間の整え方の工夫</p>	<p>「栄養学」</p> <p>「食品学」</p> <p>「食生活実習Ⅰ」</p> <p>「衣生活論」</p> <p>「ファッション造形実習Ⅰ」</p> <p>「住生活論」</p> <p>「生活経営学」</p>	<p>A</p> <p>A</p> <p>A</p> <p>A</p> <p>B</p> <p>A</p> <p>B</p>
<p>C 消費生活・環境</p> <p>(1) 金銭の管理と購入 ア (ア) 購入方法や支払い方法の特徴, 計画的な金銭管理 (イ) 売買契約の仕組み, 消費者被害, 物資・サービスの選択に必要な情報の収集・整理 イ 情報を活用した物資・サービスの購入の工夫</p> <p>(2) 消費者の権利と責任 ア 消費者の基本的な権利と責任, 消費生活が環境や社会に及ぼす影響 イ 自立した消費者としての消費行動の工夫</p> <p>(3) 消費生活・環境についての課題と実践 ア 環境に配慮した消費生活についての課題と計画と実践, 評価</p>	<p>* 「衣生活論」「住生活論」で「環境」を取り上げている</p>	<p>B</p>

出所：学習指導要領解説²⁾より筆者作成

2. 教員採用試験と大学の学修

本学の専門科目の授業で令和2年度広島県教員採用試験「中学校 技術・家庭科（家庭）」³⁾を既習しているか否かをシラバスの検討及び一部授業担当者に聞き取った。その結果「高齢者の介護・環境教育」が未既習、「ワークライフバランス」・「被服実習に関する（ボタンホールの取り付け）」・「住環境に関する（シックハウス症候群，換気）」について用語は取り上げているが試験問題を解くには不十分と考えられる。教職課程履修の学生に教員採用試験の過去問題を示すと、一次試験を突破できないと思い資格取得のみを目指す学生もいる。

表2. 令和2年度広島県教員採用試験「中学校 技術・家庭科（家庭）」の
出題分野と大学での学修状況の関係

試験問題の出題分野	大学での学修状況
① 食生活	
・栄養素（無機質）の働き	◎
・調理に関する（調理性）	◎
・献立に関する（食品群・食品群別摂取量のめあす）	◎
② 家族・家庭生活	
・幼児の生活と遊び・幼児の発達と遊び	◎
・ワークライフバランス	△
・高齢者の介護	×
③ 衣生活	
・被服材料に関する（繊維の特徴・織物の組織）	◎
・被服実習に関する（ボタンホールの取り付け）	△
・衣服の手入れに関する（洗剤の働き）	◎
④ 消費生活・環境	
・契約に関する（クーリング・オフ制度）	◎
・収入・支出に関する（可処分所得）	◎
・環境教育	×
⑤ 住生活	
・住環境に関する（シックハウス症候群，換気）	△
・地震対策	◎
・居住面積	◎

出所：令和2年度広島県教員採用試験「技術・家庭（家庭分野）」³⁾より筆者作成

3. 教職課程履修者の教員免許の取得理由

2014年～2020年に教職課程を履修した学生に「家庭科教育法」の授業ガイダンスの際、中学校教諭二種（家庭）免許取得の主な理由を個別面談で聞き取り調査した結果は、教職免許取得の理由は教職課程履修者総数33名中の19名が家族（親からや祖母やきょうだいから）の勧めと答えている。14名が学生の意思（資格がほしい、将来の仕事の選択の拡げるため、教員への憧れ等）と答えている。

表3. 中学校教諭二種（家庭）免許取得者数及び取得予定者数と取得の主な理由

	年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2021年
取得の主な理由	総数	2	5	3	6	2	10	5
親からや祖母やきょうだいの勧め	19	1	3	2	5	1	5	2
学生の意思（資格がほしい、将来の仕事の選択の拡げるため、教員への憧れ等）	14	1	2	1	1	1	5	3

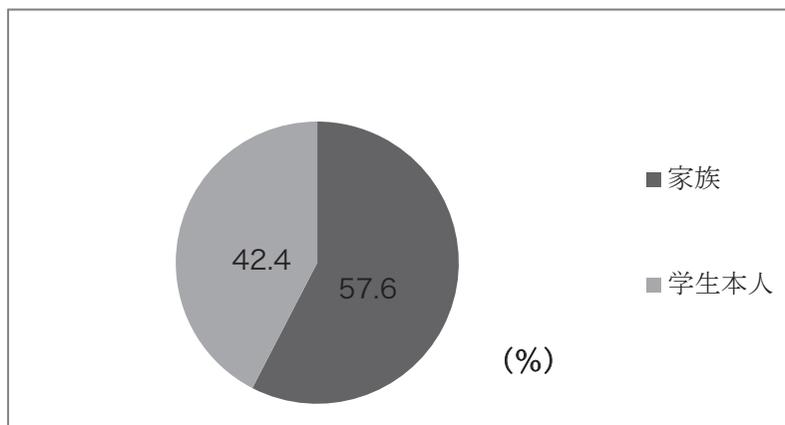


図1. 教員免許取得の主な理由

*注：2020年は、教職課程履修者はゼロ。2021年は取得予定者の理由を記載

4. 考察

本学科は、教科に関する専門科目を指導する教員が生活学の視点での専門科目を設定しており、教職に関わる科目という視点が薄く、教育実習で学生が中学校で授業を受け持つことを想定する面が乏しい。そのため教育実習において学生は中学校での授業の教材研究が不十分な状況である。筆者は中学校の現場での指導を行っており、学科の専門科目である「栄養学」「食品学」「食生活実習Ⅰ」を担当し‘中学校で教える’視点を大学での授業を構成しており、教育実習での食生活の分野の授業に関しては中学校での授業をイメージしていることから、学生は授業展開をスムーズに想定することが出来ている。つまり大学での専門科目の授業が中学校での授業展開のモデルになる。例として「ファッション造形実習Ⅰ」いわゆる“被服実習”をあげる。実習生が生徒たちに製作の際に示範（デモンストレーション）を指導す

る際に、生徒により進度別が違うことを想定して、進度別見本や段階見本の準備の必要性に気づく。学生は自身が受けている大学で授業の指導法を参考にし、対象が中学生ならどのような授業準備が必要かとイメージできる。特に、授業の進め方（導入・展開・まとめ）で構成されているか否かは、教育実習で教える側に立つ側の実習生が授業をコントロールできるかに影響する。そのことが向上心を持って三週間の教育実習をやり抜く姿勢に現れる。森田は教職課程履修の授業担当者が、学科の専門科目と教職の教科に関する科目という2つの面として捉えるのではなく、教職課程履修者の指導には大学での授業スタイルを中学校での教育実習の指導のモデルと踏まえて授業を構築することが有効としている⁴⁾。

短大2年生の7月（2020年度はコロナ禍で8月下旬）に実施される教員採用試験では、当然ながらこの時点では大学での専門科目は履修が終了していない。現実には6月～7月には教育実習、そして企業への就職活動も重なり教員採用試験どころではない。採用試験への取り組みもあまりせずに取りあえず試験を受けるのみという状態である。本科において中学校教諭二種（家庭）教員免許取得希望者は学科学生の数%（令和2年度は7%）ほどである。卒業必要最低単位64単位よりも多くの科目を履修し、2年次前期の三週間の教育実習、特別支援学校や社会福祉施設での介護等体験7日間など教員免許状を取得するには学生自身の強い意思が必要で、その中でも2年次の前期にある三週間の教育実習は教職に就くか否かを決める。川嶋らの「教育実習は学生の成長に資するものである」に通じている⁵⁾。教員になるか否かに関わらず、教育実習は学生の人間的な成長を促す。当初、企業に就職活動し内定をもらいながら、短大卒業目前に非常勤講師の道を選んだ学生が何人かいる。「中学生が授業の中で見せてくれた真摯な顔や先生がたの熱心な姿に“やりがい”を感じ、力不足な自分だが教員にチャレンジした」と大学に来て異口同音に述べている。

本学科を4年前に卒業した者が、今年度広島県教員採用試験中学校「技術・家庭科（家庭）」に合格した。短大2年次生には一次試験に落ち、一般企業に内定をもらったが短大卒業直前に教職に就きたいと思い広島市内公立中学校に中学校全学年の「技術・家庭科（家庭）」の非常勤講師になった。非常勤講師1年目は教科指導が間々ならず大学に来ては教材研究をし、一歩ずつではあるが着実に努力をしている姿に応援するのみであった。非常勤講師や臨時任用を4年間続けて「中学校の家庭科の専任教員になる」という夢を叶えることが出来た。この卒業生の母親は学生が教職課程を履修する際に「教員免許は将来、役に立つ。応援するから取得しては…」と免許取得を勧めた。そして非常勤講師として教員になった際も採用試験に合格するまで良き理解者であった。教員免許取得した理由の57.6%が、親や祖父母やきょうだいからの勧めで履修している。家族が教員免許の意味を理解しているからではないか。このことは「短大卒では、中学校教諭二種免許状は使えない。教員採用試験に合格しないから、教職課程は不要だ。」という教職課程に対する意見に一石を投じたのではないか。

清水は短期大学における中学校二種免許の意義として4つことを提示している⁶⁾。第一に、「大学における教員養成」原則を改めて再認識することである。短大も大学であり、教員養成を担う資格と社会的責任がある。従って、それにふさわしい教職課程の充実を図っていく必要がある。現に、二種免許状保持者が教育現場に欠くことができない役割を負っている。第二に、多様なルートによる多様な個性を持った教員を育成する大学の中で少数派である短大生が教員になるためには、短大での教職課程履修だけでなく、編入や通信教育などを経て、あるいは非常勤講師や臨時任用などで苦労を経て教員になることが多い。そうしたプロセスを経た学生たちの強固な意志や努力は、多様な教員の供給源として重要な意味があるだろう。第三に、二種免許の取得は教員になるための「はじめの一步」として大きな勇気を与える。教員採用試験の落ちても非常勤講師や臨時任用にはなることができる。第四に、教員になるか

どうかに関わらない大学における教養教育としての意義である。短大の学生が将来の市民・母親として、教育・人間・子どもに関する専門的教養やコミュニケーション能力を有する人材として成長することは、それ自体として重要な社会的意義を有し、大学としての社会的使命を果たすことでもある。清水⁷⁾が提示した4つの意義について、本学科の教職担当であり教職センター会議委員をしている筆者は、教職課程履修者との関わりで共感する点が多い。教育現場は、生徒や保護者が多様化し、新卒の社会経験が乏しい教員は教員への夢と現実のギャップに悩み、教員自身が心を病む事例をよく見聞きする。短期大学出身は、二種免許の取得は教員になるための「はじめの一歩」とし、教員採用試験の落ちても非常勤講師や臨時任用などの多様なルートを経る中で、冷静に自己の適性や教育現場の中で埋没しない骨太い人間性が育ち教育現場に対応できるのではないか。本学科のディプロマ・ポリシー（卒業認定に関する方針）～職業人としての自覚に深め、継続的に専門性を高めつつ地域社会や教育界における課題を分析し問題解決する力と態度を身に付けている～と合い通じる。

教員免許の取得を促すならば、教職課程の充実を図っていく必要がある。また、デミールら⁸⁾が提言している教職に関する専門科目つまり家庭科内容学の授業担当者と家庭科教育学担当者が共通して教材観の教職能＝大学の授業スタイルを中学校での教育実習の指導のモデルとする視点や根岸⁹⁾らが教員養成系学部と一般学部学科の生活学としての専門科目と教職に関する専門科目を架橋する領域科目ともいう科目「教材研究」（仮称）を設置することを教員養成系でない学部や本学科のような教職課程を持つ学科では創設できないかと考える。さらに、毎年のように年度初めに中学校の校長先生から「貴校の二種免許保持者を紹介してください。非常勤講師の家庭科先生を求めています。」と問い合わせの電話を数件頂く。そして二種免許を保持している卒業生は企業で働いており、お断りすることが殆どである。二種免許保持者が教育現場で安心して活躍できるための待遇面の改善や仕組み作りがあれば、学校現場の実情からも二種免許の活用の余地が広がるのではないか。

V. まとめ

短期大学における中学校二種（家庭）教員免許の意義について、教育実習と教員採用試験という2つの観点から検討した。短期大学の教職に関する専門科目の中には教職能＝大学の授業スタイルを中学校での教育実習の指導のモデルという視点がなく、中学校「技術・家庭科（家庭）」の指導内容が包括されていないという課題がある。教員採用試験においても同様な状況がある。中学校二種（家庭）教員免許の取得は教員になるための「はじめの一歩」であり、多様なルートを経て教職に就くことは骨太い人間性が育ち、教育現場に対応できる。教職課程の学びは将来の市民や親になる際に有効である。また学校現場の実情からも中学校二種（家庭）教員免許の必要性と活用の余地が示唆された。

VI. 文献

- 1) 6) 7) 清水康幸：短期大学における教員養成の意義—中学校二種免許の歴史的 성격に即して—，総合文化研究所年報，第26号，pp.43-57（2018）
- 2) 文部科学省 学習指導要領解説（平成29年告示）技術・家庭編，pp.118（2018）
- 3) 令和2年度広島県教員採用「中学校 技術・家庭科（家庭）」試験，広島県教育委員会，2020年9月，<https://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/04file/>，2020年10月12日閲覧

- 4) 森田清美：中学校教諭二種（家庭）の学修の一考察—教職課程「教科に関する科目」の指導の視点から—，比治山短期大学部紀要，第50号，pp.48-55（2015）
- 5) 川嶋健太郎，篠塚到子：家庭科教員養成に関する一考察，尚絅大学研究紀要第6号，pp.135（2012）
- 8) デミール千代，藤井志保，村上かおり，鈴木明子，今川真治：広島大学学部・附属学校共同研究紀要41号 pp.99-108（2013）
- 9) 根岸千悠，瀧上孝：教員養成教育における教科専門科目と教科専門科目の架橋領域科目に有効性の検討，国立教育政策研究所紀要 第142集 pp.175-183（2013）

（受理 2020年12月15日）

短期大学における中学校二種（家庭）教員免許の意義と課題

森 田 清 美

要 旨

短期大学における中学校二種（家庭）教員免許の意義は、教員になるための「はじめの一歩」であり、多様なルートを経て教員になることで教育現場に対応できる人材の育成である。大学は教員養成の担う資格を認定するという社会的使命と社会的責任がある。従って、それにふさわしい教職課程の充実を図る必要がある。中学校二種（家庭）教員免許を得るための教職課程の学びは将来の市民や親になる際に有効である。さらに、学校現場の実情からも中学校二種（家庭）教員免許の必要性が示唆された。

キーワード：中学校教諭二種免許，教員養成，教職専門科目，教職能

Abstract

The significance of the junior high school two kind (home) teacher's license and problem in a junior college

MORITA Kiyomi

The significance of the junior high school two kind (home) teacher's license in a junior college is the first one "step" to become a teacher and is upbringing of the human resources who can answer to a field of education with becoming a teacher via various routes. There are a social mission and social responsibility that a university authorizes the qualification teacher education carries. Therefore and it's necessary to plan for substantiality of a suitable teacher-training course. When it's future citizen and parent, the learning of the teacher-training course to get a junior high school two kind (home) teacher's license is effective. Necessity of a junior high school two kind (home) teacher's license was also suggested from the real state of affairs of the school site.

(Received December 15, 2020)